

随想 岡本太郎讃歌

おかだきよし

岡本太郎って何者なんだろう。

我々に何を残し何を伝えようとしたのだろうか？

3月末だと言うのに雪の舞う寒い日だった。島根県立松江美術館へ「岡本太郎展」を見に行った。“芸術は爆発だ” 眼光をむいてこちらを睨み付けるような面構えになつかしさを感じた。

岡本太郎は1911年、漫画家一平と歌人、小説家かの子との間に生まれた。一平の仕事の関係で1929年（太郎18歳）現在の東京芸大を中退して両親とフランスに渡った。その後両親は帰国したが彼はひとりフランスに残りさまざまな芸術家と交流を深め抽象芸術運動に加わり、同時にパリ大学で民俗学を学んだ。約10年間のヨーロッパ生活を経て1940年29歳で帰国している。

その後二等兵として31歳から4年間戦地に行っている。彼は戦地に行く前から二科賞を受賞したり銀座三越で個展をしている。彼は戦意高揚のためのプロパガンダとしてではなく一兵士として戦地に行っている。1947年（36歳）に二科会員に推挙される。その頃から自からの芸術理念である“対極主義”を提唱している。“対極主義”とは相反する、矛盾する二つのテーマを同一画面に構成、表現することで緊張感たかめる手法と解釈している。

注目すべき事は1949年（38歳）第一回アンデンパンダン展に「赤い兎」を出品している事だ。その後のアンデンパンダン展に再々重要なテーマで作品を発表している。

ボクが陶芸にかかわっているので気づいた事だが第4回アンパン展にモザイクタイルの壁画「太陽の神話」を出品している。陶壁レリーフのおそらく第1作は1956年（45歳）の丹下健三設計の旧都庁舎に11面からなるレリーフ「日の壁」だと思う。新宿に今の新庁舎が計画された時、旧庁舎のレリーフを残すべきか壊すべきか論争になったのを思い出す。著作権は制作者の岡本太郎にあるが本人の了解のもとで建物と一緒に壊された。レプリカは残されている。

1954年（43歳）現代芸術研究所（通称G,G,K）設立。都市計画家、建築家、デザイナー、彫刻家等の専門スタッフが岡本太郎のプロジェクトを陰から支えている。

1968年（57歳）メキシコのホテルの依頼で大壁画「明日の神話」30m×5, 5mの制作の為にメキシコにアトリエを構える。オープン前にホテルが倒産し長年行方不明だったこの大壁画が1年前に見つかり現在愛媛県で修復中との事。シケイロス等の壁画運動が盛んな頃メキシコに乗り込んで彼らに負けない迫力のある大壁画を完成させた。作品のテーマもピカソのゲルニカに匹敵する重いテーマ“原爆”だった。彼が世界に向かって重大なメッセージを発表した記念すべき代表作だと思う。

1970年（59歳）大阪万博で「太陽の塔」制作。計画が発表された時、当時の美学生、若いアーティストの間では「なんで？・どうして？」の疑問の声。既成の概念、価値感、権

力に挑戦しているイメージがあったのに何故国家的大プロジェクトに中心メンバーとして参画するのか、体制の枠の中に組み込まれたのか疑問視したものである。その頃の日本は高度経済成長の絶頂期だった。岡本太郎は日本全体が経済至上主義、進歩主義、モダニズム一色になることを危惧しその惰性への挑戦として（一步立ち止まって宇宙と一体となって一緒に遊ぼうよ）と彼独特のユーモアと警告を込めて「太陽の塔」を制作したのではないだろうか。

1972年（61歳）新幹線岡山駅の陶壁レリーフ「躍進」制作。

特にこの前後各地にパブリックアートとしてレリーフ、モニュメント、彫刻、オブジェ、等多数制作している。

1996年1月7日84歳、急性心不全で亡くなられた。前年に出身地の川崎市に主要な作品群を寄贈している。

1998年南青山の自宅兼アトリエに岡本太郎記念館が開館（東京都港区南青山6-1-19。TEL03-3406-0801）。

1999年川崎市岡本太郎美術館が開館（川崎市多摩区柘形7-1-5。TEL044-900-9898）。

岡本太郎って一体何者だったのだろうか？絵画、彫刻にとどまらず文筆活動も旺盛だった。縄文土器の美を再発見し芸術の域まで高めた。沖縄、東北地方を取材し埋もれた民俗行事を広く紹介し伝統文化に位置づけた等功績は計り知れない。画家、彫刻家、民俗学者、評論家、写真家、どの枠にも納まらないとてつもない“巨人”だったのだ。

ボクが学生の頃、羽仁五郎の『都市の論理』小田実の『何でも見てやろう』岡本太郎の『今日の芸術』がよく読まれていた。岡本太郎は『今日の芸術』の中で言っている。芸術は、

うまくあつてはいけない
きれいであつてはいけない
こちよくあつてはいけない

こんな言葉信じますか？普通我々は芸術、美術は上手に綺麗に作り見る人に心地よさを感じてもらう事が最高の喜びであり目標で有る筈なのに何故逆の事を言うのか？このフレーズの中に岡本太郎の本質が凝縮されているように思う。大事な事はここで“感動的であつてはいけない”とは言っていないことだ。

見る人に迎合することなく自分の信念、主義を貫けということか。ボクの作品もこうありたいと願っている。子供の純で無垢で無条件で何の代償も求めない、自分の身体からほとばしるエネルギーで大人や他人の目を意識しないで瞬間瞬間子供本来の欲求から生み出される作品こそ最高の芸術作品である。と言っている様に思う。高学年になるにつれて大人達が個性の芽を摘み取ってしまう。この現実をどう思われますか。

思い起こせば岡本太郎先生とは1971年新幹線岡山駅の陶壁レリーフ「躍進」の制作をお手伝いしたのがご縁である。太郎先生は60歳、万博の直後で絶頂期だった。当時、万博の「太陽の塔」をはじめ「座ることを拒否する椅子」や他の陶壁レリーフ等でよく信楽の

メーカー（窯元）に発注制作をしていた。ボクはメーカーの依頼で「躍進」の制作責任者となった。南青山にある太郎先生のアトリエに行き模型（マケット）作りのお手伝いに参加した。約1週間から10日ほど通った。先生は紙に絵筆で走り書き（ボクにはそう思えたのだが先生の頭の中にはイメージ、構想が出来上がっていたのだと思う。）の下図を描いた。それを当時、東京芸大の彫刻科出身の不破さん（GGKのスタッフ ボクより少し年上に見えた）が粘土で半立体のレリーフにしていく。先生のチェックを得てそれを石膏型にとる。更にFRPの型に取り研磨仕上げをしてそれにアクリル絵具で彩色して5分の1のマケットの完成である。マケットの完成度が本番制作に大きく左右する。

当時先生はNHK放送センターロビーの大壁画「天に舞う」をはじめいくつもの制作を同時進行させていた。マケットを信楽まで運びいよいよ本番開始である。

このレリーフ「躍進」の完成寸法は横8m×縦5m＝約40m²、ポリウム（厚み）は30cmから40cmあったと思う。陶器は焼くと必ず収縮する。レリーフ土で平均12%程小さくなる。

制作場所の面積はゆとりをもって10m四方の広さが必要だが屋内では確保できないので屋外にテントを張った。地面を整地して合板パネルを敷きつめる。合板の継ぎ目をガムテープでしっかりとめる。大型土練機から圧倒的迫力で押し出される土を20kg～30kgの土塊にしてパネルを目掛けて頭上から全身で打ちこむ。空気はいらないように打ちこむ。

夏場の暑い時期 大変な重労働である。職人さんに手伝ってもらおう。レリーフの平均的厚み20cmぐらいまで打ちこむ。平面の基礎板作りまで相当の日数がかかった。暑い中乾燥が早く亀裂が生じるのを防ぐため毎日帰り際にじょろで水をかけビニールを覆う。いよいよ造形作業に入る。5分の1のマケットから忠実に細部まで5倍プラス12%に拡大したものに作らねばならない。厚み方向を5倍にするのが難しい。マケット、基礎平板両方に星取り表を作成し細かく確かめながら全体の図柄を土の上に描いていく。低いところは削り、厚いところは更に土を盛り上げていく。全体を見ながらも細部を見る。細部を見ながらも全体を見るの繰り返しである。

他人の作品を忠実に作ることもぐらい難しい事はない。まして岡本太郎の作品である、緊張の連続だった。唯一救いだっただのは表面処理が無機質なツルンとした感じで良かったことだ。特別にテクスチュアを付けたリデテールにこだわったりする必要はなかった。

造形作業に入ってから先生と敏子さん、不破さんが来られた。

ここで敏子さんについて触れておきます。旧姓平野敏子は岡本太郎の永年のマネージャーでありパートナーであり彼女の存在無くして岡本太郎の存在はない。太郎の死後養女となり岡本敏子となる。岡本太郎記念館の館長としてマスコミや著作等で岡本太郎の作品、理念なりを社会に広める活動を精力的に行っていたが突然昨年4月20日になくなられた。亡くなられた日がメキシコで見つけた大壁画「明日の神話」が日本に返される日だったと言う。

さて先生がチェックされるのは造形の仕上がり具合だけである。この期間 先生と敏子

さんは3、4回来られたと思う。ボクが毎回京都駅の新幹線のホームまで車で送迎していた。

夏のテントの中は蒸し風呂状態、先生は時には短パンひとつの裸になられ、時にはウイスキー片手にボクの造形跡を手直しされた。思い出されるのはある時ブラジャー持って空を舞う天女のところでいきなり先生はボクに向かって「君はオッパイが大きいのが好きかね」と笑いながら言われた。ボクは少し照れながら「好きです」と答えた。先生はしょうがないなというような表情で大きく盛り上がった胸の土を丁寧に削っておられた。初秋には信楽の山中で近江牛の鍋を囲んだのも楽しい思い出である。

先生が最終確認されたら造形作業も先生の作業も終了する。この段階では土は柔らかい状態を保っている。

図柄（色分け）線に沿って切断していく。刃渡りの長いさしみ包丁でも厚み40cmでは切断できない。鉄工所に行って刃渡りの長い刀のような物を作り切断していった。切断したブロック（ピース）の数は600、700個になったろうか。少しずつ切り離し隙間を開けて徐々に乾燥させる。手に持てる硬さになると裏面を削るというより土を掘りだし中を空洞に均一の厚さにする。コバ面にダボ穴を開け裏面に割り付け番号を入れる。乾燥台車に乗せる。ここで割り付け（施工）図面を作成する。しばらく乾かし形がしっかりするとパネル上に図柄どおりに並べる。細部の仕上げと形状、寸法のすり合わせ作業をしっかり行う

焼き上がり寸法が決められた寸法より決して大きくなってはならない。少し小さめに焼き上げるのがコツである。現場の壁の天地両横とも寸法はかかりり決まっている。大きくなれば現場でどこかを切らねばならないので大変な作業なる。小さくすれば目地で調整して逃げる事が出来る。だからすり合わせ、寸法調整は手抜きができない。又、台車に乗せ乾燥室で白く乾くまで乾燥する。乾燥が上がると又寸法、形状のすり合わせをして素焼きの窯に入れる。約800℃で焼く。素焼きが上がると又すり合わせする。いよいよ施釉作業にはいる。マケットの色と間違わない様に色別に仕分けする。先生の作品は原色が多い、色釉は合計12色ぐらいあったと思う。コンプレッサーで吹き付け施釉する。本焼きの窯詰めをする。1240℃位で焼き上げる。本焼き品を窯出し、パネル上に並べる。割り付け図面を見ながら600、700個のピースを一つ一つ確認しながらまるでジグゾウパズルのように並べていく。壁に張るのと同じように目地間隔を取って並べる。横、縦共決められている寸法の中にピッタリ納まっている。あっ、色が一箇所一ブロック間違っている。緑色であるべき個所が黄色になっている。時間的に焼き直す事もできない。考えぬいた末ペンキで補修することにした。レリーフの場合たまにある事だが決して許されることではない。幸いにして今見ても全く判らない。図柄は間違いなし。これで焼成品は完成した。

いよいよマスコミに公開する日がきた。寄贈者の山陽放送をはじめ、週間新潮等、十数社が取材に来た。先生はお見えにならなかったがパネル上の作品はフラッシュの嵐にも動じず存在感があった。感無量だった。

レリーフ作品は一つずつ厳重に梱包され信楽から岡山に運ばれる。旭川沿いにある山陽

映画社の倉庫に一時保管された。施工は平田タイル京都支店からレリーフ施工専門のベテランの職人さん3人（親方は金さん60歳代）と施工監理のボクと4人。まず現場の壁の前の床面に割り付け図面を見ながら職人さんとレリーフを壁に張るのと同じように並べる。寸法、形状、色等を確認。職人さんがレリーフの上面に一定のピッチで墨を打つ。壁体の凹面には前もって横縦に一定のピッチで鉄筋を入れてある。

レリーフブロックのダボ穴に赤銅線を通して鉄筋にしばりつけ裏側にモルタルを流し込む。張るというより積み上げる、石積み工法だ。ボクは全体を見ながら細部を見ながら職人さんに指示をだす。目地の間隔、ブロックを置く角度が難しい。地面に並べて確認はしているが壁面の高さ方向に積み上げるのははじめてである。どのようなトラブルが出てくるか予想がつかない。目地の間隔やブロックの角度が狂ってくると寸法は膨張したり小さくなりすぎたり、図柄がつながらなくなる。ところが最後の最後になって最上部の天井とのドンつきの部分が大きくて納まらない。目地にモルタルがかんで目地が少しずつ開いて予想以上に寸法が大きくなったのだ。横方向は納まっているのに。ここまできたら下の方を外して又積みなおす事は職人さん泣かせになり、工期も迫っているのでそれは出来ない。ボクの決断にかかっている。金さんの困惑した表情が今も忘れられない。最上部を切断してボーダー状にして納めるしかないと決断。職人さんは見事に納めてくれた。素人目には全くわからない。これで陶壁レリーフ「躍進」の完成です。今でもこの壁面の前を通るたびに自分の未熟さに冷や汗をかいている。いよいよ1972年3月15日新幹線開通式当日。先生が来られたが色の補修とボーダーについて気づいておられなかったのか？何もおっしゃらなかったのを胸をなでおろしたのを覚えている。色補修とボーダーの事はここだけの話にしておいて下さい。造形作業に5ヶ月、焼成に2ヶ月、施工に1ヶ月、合計約8ヶ月かかって全てが終了した。先生、数々の失敗どうかお許しください。

茶陶や食器でなく建築、インテリアの周辺の陶器を目指して信楽に入ったボクはそれまでに小さいレリーフを3、4作制作していたが新幹線のような大陶壁は経験がなかった。こんなやりがいのある面白い世界はないと思い、ますます引き込まれていった。

その2年後ボク自身の作品として神戸市魚崎の焼却場の大外壁レリーフ（横32m縦5m＝160㎡、厚み30から40cm）「宇宙」を制作したが先生の影響を色濃く受けている様に思う。このレリーフは今でも図柄つづきの陶壁では日本一大きな面積のレリーフだと自負している。新幹線のレリーフをお手伝いできた事はボクにとって本格的なレリーフの世界に導いてくれた記念すべき貴重な経験だった。生涯忘れることはない。

岡本太郎先生に最後にお会いしたのは20数年前、岡山市の市民講座で特別講師として招かれた時、時間を作っていただき、マスカットを手土産に喫茶店でお目にかかったことだ。敏子さんはよく覚えてくださっていたが先生は記憶になかったようだ。ボクはそこで「新幹線のレリーフの制作をお手伝いしたことをこちらで宣伝させてもらっています」と申しあげると先生は「私にリポートを少しよこさない」といたずらっぽく笑いながら言われた。

先生が亡くなられて 10 年になる。では岡本太郎って一体何者だったのだろうか？

閉塞感が充満している今こそ風穴を開けてくれる爆発力とエネルギーを持った岡本太郎が必要な時ではないだろうか。岡本太郎の存在価値はますます大きくなっていく。

ボクの結論は岡本太郎は“岡本太郎以外何者でもない。岡本太郎なんだ”と言う事です。生前“芸術は爆発だ”と言い、最後は“人生は爆発だ”と言われんばかりに宇宙の彼方に飛び去ってしまわれた。岡本太郎先生有難うございました。

2006 年 4 月 25 日